作 基
訳 忍
朗

駱 賓
小 野
飯 塚

小 説

北望園の春

他五篇

岩波新書

196

駱賓基著
小野忍
飯塚朗 訳

小説

北望園の春

他五篇

岩波新書

196

小野　忍

1906年東京に生まれる
1929年東京大学文学部卒業
専攻—中国文学
現在—東京大学講師
訳書—趙樹理「結婚登記」
　　茅盾「腐蝕」

飯塚　朗

1907 年横浜に生まれる
1936 年東京大学文学部卒業
専攻—中国文学
現在—北海道大学助教授
訳書—巴金「家」巴金「滅亡」

北望園の春　　岩波新書（青版）196

昭和30年3月20日　第1刷発行

¥100.

訳　者　小野　忍（おの しのぶ）
　　飯塚　朗（いいづか あきら）

東京都千代田区神田一ツ橋2—3
発行者　岩波雄二郎

東京都青梅市根ケ布385
印刷者　山田一雄

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2—3　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　精興社印刷・田中製本

目次

老女中……一
紅いガラスの物語……三九
北望園の春……六五
農家の子……一一九
王媽媽……一四五
正月休暇……一七五
解説……二〇五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一九四一年十二月八日以前、イギリスが香港（ホンコン）を統治していた時代のことである。黄泥湧（ウォンネイチョン）峡道（ギャップロード）という、山道の閑雅なバス道路のそば、総督通りに寄った一角に、スペインふうの別荘があった。夏、六番のバスに乗って、浅水湾（香港島南岸の湾）の海水浴場へ行ったことのある人は、このスペインふうの別荘の鉄格子の門の前を通ったことであろう。

このスペインふうの別荘はいまは砲火にこわされている。二階建ての建築は階下をあますだけで、それも半分は雨ざらしになっている。

この別荘の主人の兪一飛（ユイイーフェイ）は高貴の出身で、段祺瑞（だんきずい）内閣の時代には、ある部（省）の秘書長をしていた。兪一飛旦那様の髪はいまは半白になっているが、まだ昔の風格を保っている。いつも葉巻をくわえ、胸は厚く、洋服は瀟洒できちんとしていて、隠退している人物とは全然見えない。一日じゅう出たりはいったりして、高貴の家の宴会に出席している。日曜ごとには自分の別荘にも客をよび、夜はまたダンス・パーティを開く。けれども、彼は、トルストイの書いたロシヤ貴族とはちがって、国内に領地を持っているわけではない。ただ、ジャワ最大のゴム工場の株を持ち、またインドのリプトン紅茶工場の、最大多数の株を握る最大株

主であるだけだ。

俞一飛旦那様のこの別荘には、セメントの自動車道と車庫と二つの芝生とがあった。芝生には、二本の亭々たる熱帯の椰子の木が自動車道の入口の両側に立っている。またオランダ種の縮れ毛の犬が一匹、時たま鉄格子の門の内側に現われることがあった。全身真白で、口は大きく、尾は箒のごとく、耳は豚のごとく、耳の先と眼の縁だけが真黒である。それが後足で坐ったまま、往き来する自動車を眺めていて、人を見ても吠えつかない。よく馴れている。その時には、たいてい俞一飛の若い奥様は昼寝をしているのだ。この犬にとって、これがいちばんさびしい時であった。

俞一飛夫人がいちばんかわいがっているのは、このオランダ種の縮れ毛の犬で、どこへ行くにも胸に抱きかかえ、ちょうど一般の貴夫人が冬のあいだ携帯用の湯たんぽを離せないのと同じだった。昼寝からさめて、まず口にするのは、「パール！　パール、パールはどこへ行ったの？」という言葉である。彼女は香港の名媛（めいえん）であったが、からだは華奢で性質はやさしく、上流社会の社交場に出入りする一般の貴夫人とはまるでちがっていた。十五、六のきわけのない子供みたいにうぶで、お化けの話がやっと聞けるようになった小学生みたいに

臆病であった。

この別荘の家事一切を切りまわしているのは、曹媽児（ツァオマール）という女中だった。彼女の祖父が兪（ユイ）邸に奉公していたから、彼女は三代目の女中である。彼女の夫はいまでも天津で、兪邸の大旦那様、つまり兪一飛旦那様の叔父にあたる人に仕えている。だから、曹媽児はこの別荘の主人がいちばん信用している雇い人で、まず半人前の主人であった。客間でどんなに高貴なお客様に会っても、曹媽児はいつも微笑を浮かべながら話をする。その微笑を含んだ態度から、彼女がどんなに寵愛を受けている雇い人であるかわかる。それで、彼女からあいそよくされると、それが煙草の火をつけてくれることでも、お茶を持ってきてくれることでも、こちらもへりくだって彼女に微笑を送らないではいられなくなる。

時には、兪一飛旦那様がお客様を招いて別荘で家庭料理を差し上げることがある。すると、曹媽児はいつものとおり奥様に向かってお指図をあおぐ。「ほかにどんなお料理を追加いたしましょうか？」「何を追加しましょうかね？」と奥様はいう。「玉葱と牛肉を一皿追加すればよろしゅうございましょう。」「いいわね。じゃ、玉葱と牛肉を炒（いた）めたのを一皿追加しましょう。」これで、おわかりになるだろう、奥様がどんな貴婦人か、ちっとも自分の意見がなく

て、曹媽児のいうなりになっている人だということが。これでまたおわかりになるだろう、曹媽児が利口で、注意深く、自分が主人公なことを百も承知していながら、いつものとおり奥様の口ぶりをたしかめ、そればかりでなく、これは奥様御自身のお考えに従ったものだと認めているということが。さらに彼女が料理の名まえをいう時、その女中としての才能をあらわして、お客様の服装や風格から推した上で、どんな料理を追加したらいいかきめているということが。もちろん普通の客は、玉葱と牛肉を炒めたのでいいが、もしもお客様の指に宝石をちりばめた指輪が見え、その上部屋へはいってくるなり、奥様と握手をするような場合には、曹媽児は奥様にお指図をあおぐ時、こういうのである。「土鍋を一つ追加いたしましたら、いかがでございましょうか？」それは鶏の水たきのことをいうのである。奥様は勘がにぶいけれど、俞一飛旦那様は、どこに曹媽児のような賢い女中がいるだろうかと彼女の聰明さに感嘆する。彼女のいう料理が不釣合だと思ったことは、俞一飛旦那様は一度もないのだった。お客様の接待をするのが曹媽児のおもな仕事で、台所には煮炊き専門の別の女中がいた。若旦那様が卵の目玉焼を召し上がる時は別で、これはやわらかくて、しかも黄味をかんでも、汁が流れ出ないやつである。これは彼女が主人の歓心を買う独特の技術で、これ

まで、ずっと秘伝にしていた。

若旦那様は兪一飛旦那様の独り子で、からだはお母様と同じように華奢だった。まだ六つで、学校に上がっていない。でも、もう宏達（ホンダー）というおとなの名まえを持っている。乳母がひとりいる。やはり安徽省の人間で、戚媽児（チーマール）という名まえ、宏達が生まれた年に来たのだが、宏達はちっともなついていない。彼女は農家の娘で、ちょっと癖があり、おもしろくなくなると、白眼で人を見て、何をたずねようが一言も口をきかない。旦那様に腹を立てたら、宏達が彼女に、靴下や靴などを出せといっても物をいわない。男の雇い人に腹を立てたら、宏達が彼女に玩具や、何かを出せといっても物をいわない。たとえいっても、つっけんどんに、「自分で見つけられないと、何でもわたしにたずねなさる。自分でどこへやったか、おぼえていないのかねえ。」旦那様はいっている。「今年の暮か来年の初めに内地へ送り帰そう。」

戚媽児はだれとでも喧嘩をする。特に台所の広東（カントン）人の女中とは喧嘩をしてから半年になるが、いまだに顔を合わせても口をきかない。曹媽児とはうまが合って、ほんとうの姉妹（きょうだい）みたいである。戚媽児が忙しい時には、曹媽児が代って若旦那様の服を洗ってやるし、曹媽児が忙しい時には、戚媽児が代ってお菜の買い出しに行ってやる。いろいろの戸棚の鍵は全部曹

媽児のズボンの腰帯に吊されていた。

曹媽児は三十二歳、戚媽児は四十五歳、戚媽児は曹媽児のことを、「曹さん」と呼び、曹媽児は戚媽児のことを、「おねえさん」と呼んでいる。戚媽児が憎らしく思っているのは宏達で、彼が両親の前で自分の口まねをしたり、自分の針仕事に対してあらさがしをしたりするのが気にくわなかった。曹媽児がいちばん憎らしく思っているのはパールで、彼が食卓のそばで旦那様や奥様のたべのこしたいちばんうまい料理を平らげてしまうのが憎らしかった。

それはやはり奥様がパールのためにまぜあわせてやるのだ。その時、曹媽児の眼はとても憎らしそうに奥様を見ている。曹媽児のこの眼差しはこの別荘の最大の秘密で、主人が顔を上げさえすれば、彼女はたちまちにこやかに笑うのである。しかし召使たちの前では、曹媽児はひどくパールを憎んだ。ある時、パールがボーイ部屋の入口へ、何かにおいをかぎつけて駈け込んできたことがある。曹媽児は秤(はかり)の分銅をうしろ手に持って近づくなり、いきなりパールの背中をどやしつけたもので、パールはキャンキャンなきながら逃げていった。

「パールどうしたの？　だれがぶったんだろう！」忿一飛旦那様の奥様は、声を聞いて、客間から駈け出してきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「だれがパールをぶつものですか。」曹媽児は笑いながら奥様を迎えて、「きっと通りがかりのイギリスの兵隊が石を投げつけたのでございますわ。いまさっきお庭の入口に坐っておりましたから。」

その時奥様はパールを胸に抱いて、キッスしていた。

「さっきから何をないていたのでございましょうねえ。奥様ちょっと御覧遊ばせ。どこにも怪我はございませんわ。もう小舎へ入れて、御門のほうへ出さないほうがよろしゅうございます。いじめられるといけませんから。かわいそうにね。まだおひるをたべていないのでございましょう。牛肉の罐詰でもあけてやりましょうか？」奥様の前では曹媽児はパールに対して、こんなに気をくばり、こんなに親身になるのだ。

この別荘にはもうひとり男の雇い人がいる。韓東洲（ハントンチョウ）といって、上海（シャンハイ）の人間だが、オーバーオールを穿くのが好きだものだから、俞一飛旦那様はいつも、あいつは工場の見習工みたいだといっている。俞邸（ユイ）では長い中国服を着ないわけにいかなかった。日常のつとめは、お客様のうしろに立って、曹媽児が持ってくる料理の皿を食卓に運んだり、自動車を掃除したり、庭の芝生を刈ったりすることである。もしも食堂に来客がなければ、俞一飛旦那様はめった

に彼に用をいいつけない。そんな時彼は車庫の側部屋で昼寝をする。日曜日には、さらに半日の休暇があり、彼がオーバーオールに着換えて、きちんとしたいでたちで、口笛を吹きながら外へ行くのが見られる。曹媽児は、このことで彼をねたんでいる。彼女は俞邸の信任あつい召使であるために、かえって日曜の半日の休暇もないのである。

大平洋戦争以前には、空が晴れて暖かな日だと、この別荘はとても静かで、窓ガラスが陽に光り、屋根瓦が陽に光り、椰子の木に時たま燕のさえずりが聞え、葉が一枚落ちてもはっきり聞えるのだった。芝生には一本一本木の影が映り、あげは蝶が一匹二匹低く飛んでいる。ほんとうに眠たくなるような天気である。雨の日はどうだろう、庭では、歩きまわる男女の召使たち、部屋では、男の子のキャッキャッという声、パールが走りまわる時の首輪の鈴の音。こうしておだやかに一日一日が過ぎてゆき、もう二年になる。

戦争が勃発した日、別荘の客間にはじめて埃が立った。出入りするお客様は昔どおりに高貴な人たちだが、彼らの立派な靴の上には砂土がついていた。車が軍用として香港政府に徴発されてしまって、彼らはみんなバスに乗ってやってきたのである。それに彼らの歩きかたもひどくせわしなかった。入口をはいる時に、マットの上で靴をこすらないし、だれの顔か

らも、いつものあの悠容迫らぬ紳士の笑いは失われて、同時に、話す声も高く、激しくなってきた。曹媽児は、主人があんなにおちつきを失い、お客様と話すにも立ったままだし、出入りするお客様のほうも立ったままで、二言三言話すとすぐさま暇を告げるなんていうのははじめて見た。

戦争の二日目には、形勢がいよいよわるくなった。兪一飛旦那様はひっきりなしに電話に出た。話が英語で、曹媽児にはちっともわからなかったが、でも戦争が緊迫していることはわかった。客間はとてもきたなくなり、ソファの位置もすっかり変った。曹媽児がちゃんと並べようとすると、兪一飛旦那様は、「かまうな、そのままにしておけばいいよ。」という。やがて客間には小麦粉と米の袋が積まれた。曹媽児は韓東洲のあとについていって、「どうして車庫へ持ってゆかないの？ 車庫は空っぽじゃないの。」というと、兪一飛旦那様が、「同じことだ、同じことだ。ここへ積んでおけばいい。」という。夜になると、客間のなかはごった返しになっていたが、夜中にも電話がかかり、引き続き数回かかる。形勢はいよいよわるくなって、台所の女中が暇をとり、食堂が臨時の客間になり、その上兪邸の食事の時のしきたりも変ってしまった。いつもはひとりが二ぜんの箸を使っていたのに、いまはなるたけ一

ぜんにして、その上二度は立ったままでたべる。俞一飛旦那様がとても忙しくて、二時間くらいしか家にいないからだ。俞一飛の奥様も唇に紅を塗らなくなった。曹媽児は、奥様の唇がとても黄色くて、まるで貧血したみたいなのにはじめて気がついた。奥様は曹媽児に向かって何度もいう。「ほんとにどうしたらいいんだろうねえ。逃げるところもなし、かくれるところもなし。」奥様のからだから、あの華奢でやさしいところも失われて、曹媽児には奥様が見知らぬ人のように思えた。微笑もその唇から消え去った。ふだん奥様は微笑しても歯を見せたことがないのに、いまはものをいう時にもあの白い歯をむき出しにする。ふだん奥様は眉を寄せる時でさえ美しく、人を魅したものだが、いまは額の皺があんなにみにくく、まったく別人のようだ。ちっとも高貴ではない。これらすべてのことが曹媽児にある新奇な感じを起させ、遠くから伝わってくる砲声よりもかえって意味ありげだった。

俞一飛旦那様は三時に帰ってきた。その時には、対岸の砲声が間断なく轟いていた。砲声は空間を貫いて、不気味な叫びをあげ、やがて砲弾が三里（一里は日本里で五町強）ばかりさきに落ちると、その瞬間にはじめて、この別荘の主人と召使は生命がこの一秒間保てているのに気づく。続いて二度目の響きが伝わってくる。砲弾が空間を貫く音はまるでこの屋根の上に落ちてくる

かのようで、主従たちがどんなに息をひそめたか思いやられる、しわぶき一つしないのだ。彼女らは客間の隅の米の袋のそばに退避していたが、みんな顔を真青にして、眼をゆっくりと重々しく動かし、まるで音の距離を測定しているかのようだった。奥様は曹媽児のそばにうつぶせになり、韓東洲が奥様のそばにうつぶせになり、彼らの間に宏達がいた。宏達はいまでも意地悪な気持を起して、小声でいっていた。「もっとそっちへ行けよ。もっとそっちへ行けよ。」そういいながら小さい肘で、韓東洲の腕を小突いていた。

ドアの音がすると、奥様は飛び起きた。「外の様子はどうですの？」

「とてもわるい。」旦那様はそういっただけで、曹媽児を呼んだ。「お前――急いで宏達の服をそろえてくれ。」「戚媽児も手伝いなさい。わしたちはすぐ出かけるから。東洲、お前はここに残るか、それともわしたちといっしょに行くか。どうするんだ。外の様子はとてもわるいぞ。お前はここに残って、曹媽児といっしょに留守番をしてもらおう。」彼がしゃべっているあいだ、奥様はいらいらして、三、四度たずねた。「いったい、外はどうなんです？」それはみな俞一飛旦那様の注意を引かなかったが、こんどは、「いつまでも何をきいてるんだ？早くお前の貴重品をそろえなさい。もう二、三分もぐずぐずしていたら、香港へ行く道が通

れなくなるんだ。早く！　宏達も服を着て！」そういうと、せかせかと寝室のほうへ行ったが、行きながらも奥様をせきたてる。「早くお前のものをそろえに行くんだ。早いほどいいんだよ。」また、「曹媽児、わしのパイプ入れはどこだ？」とどなる。彼はパイプをさがしているのではなく、パイプ入れのなかに金庫の鍵がはいっているのだ。

俞一飛旦那様は奥様をうながして、「早くおいで！」というなり、ひとりであわただしくさきに出ていった。待ちきれないかのように、手に皮のトランクと冬外套を二着かかえながら。戚媽児はとてもあわてて服を肩に引っかけると、駈けながら袖に腕を通して、「坊っちゃん、さあ駈け足で。」という。

「曹媽児、ちゃんとお留守番をしてね。」奥様は出しなに、そういった。それから寝室を出て、ドアをバタンとしめ、かわいいパールを部屋のなかに閉じ込めてしまった。

曹媽児は不気味な青い顔をして、入口の階段に立ったまま一言も口をきかなかった。松の木にまきついて育った藤づるが、突然そのささえを失ったとしたら、どんなにこわいことだろう。ことにそれが、嵐の渦巻のなかだとしたら。

その時、彼女はまだ俞一飛旦那様のせかせかと歩いてゆく後姿を見守っていた。戚媽児の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com